

足関節鏡手術の風景



足関節は足や指の動きに関わる多くの腱や筋肉、神経があるため、通常の手術を行うとその損傷が懸念されます。また足の手術は著しく腫れたり、術後ギプスを巻かなくてはならなかったりすることがあります。関節鏡手術は創をほとんど残さないでこのような心配が少ないのが特徴です。

●方法

全身麻酔あるいは脊椎麻酔（下半身麻酔）の上、足関節の前方に6 mm程度の小切開を2ヶ所つくり、ここに細い関節鏡を入れ、他の小切開部より関節内に手術器具を入れ、テレビモニターに映る関節内の画像を見ながら手術を行います。

●手術後の経過

手術後は翌日より歩行可能です。痛みや腫れの程度によりますが1～2週で通常歩行が出来る場合が多いです。

肩・肘・足関節鏡手術後の入院はいずれも3～10日程度です。

4. 関節鏡手術の特徴

近年進歩してきたこれらの手術には、現状では以下の様な問題点があるので留意してください。

① 病態により関節鏡だけでは行えないものがある

現在、肩・膝についてはほとんどの病態が関節鏡での処置で可能です。しかし、肘については、病態が大きくなると関節鏡手術により短期的には回復しても、長期にスポーツを継続しようとする場合には皮膚を開く通常の手術を追加しないと処置できないものもあります。このことから肘の痛みに関しては、早期の診断が必要です。疼痛が3週間以上続くような場合には、専門医に早めに受診させた方が良いでしょう。そのことが、3週間の安静ですむか、1年以上のスポーツ中止になってしまうか選手にとっては大きな分かれ道となる可能性があります。